

## 南九州地方1県の漁村における高齢女性の育児経験者が語る 母親としての育児を巡る体験

### Experience of child-rearing of mothers through analysis of elderly women's narratives in the fishing village of one prefecture of South Kyushu region

荒武亜紀<sup>1)</sup>, 野間口千香穂<sup>1)</sup>, 松岡あやか<sup>1)</sup>

Aki Aratake, Chikaho Nomaguchi, Ayaka Matsuoka

#### Abstract

Child care in local communities could be further supported with suggestions on child-rearing and child-rearing environments for the society of today. Accordingly, the objective of this study is to elucidate narratives on child-rearing and the child-rearing environment from elderly women's with personal experience of child-rearing in fishing villages. The semi-structured interviews with nine women aged 80 or above who lived in fishing-industry-dominated areas and had experience of child-rearing provided data for analysis. The results of the analysis indicated six categories: "neighborhood ties", "responsibilities of family heads for safeguarding children and the family business", "cultivate child-rearing ability through caring for children from a very early age", "incorporating child-rearing into daily activities", "explaining local community rules to children", and "promoting and preserving child health." "Neighborhood ties" had a dual significance in the child-rearing environment; mothers were supported in their parenting role at the same time as being in a setting where child-rearing ability could be cultivated through experience.

Narratives focusing on the role of the mother emphasized the progressive socialization of children and the support for child care in the local community provided by people in the neighborhood. Maternal child-caring became a natural act in the mother's own upbringing, based on frequent experiences of regularly looking after younger siblings as a part of life from a very young age. Accordingly, this analysis suggests that child care needs to be implemented as a function of the local community. Furthermore, the strengths and nature of the relevant local community can underpin a community-based integrated care system capable of responding to local diversity. We also suggest that the reinforcement and collaboration entailed in such a system are vital for child care in local communities.

キーワード: 漁村, 育児, 近隣の絆, 地域コミュニティ, 高齢女性

fishing villages, child-rearing, neighborhood ties, local communities, elderly women

#### I. 緒言

現代社会において、親たちの育児不安や子育て支援への課題がある。この背景には、少子化、核家族化に伴い、幼少期からの親準備性を育む機会の減少

(岡本他, 2004; 柏木, 1996) や人間関係の希薄化、地域社会の結びつきが脆弱になり、世代間で継承すべき育児方法や知恵の衰退を引き起こしていること(寺本他, 2015) があげられる。さらに、近年増加の共働き世帯、男性の労働時間の増加、夫の単身赴任に伴う母

1) 宮崎大学医学部看護学科 子育て世代・子ども健康看護科学講座

Department of Maternal/Child Health Nursing and Midwifery, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

親のワンオペ育児,離婚による母子世帯(厚生労働省,2017)など多様な家族の形態は,家族内でのサポートを得にくい状況をもたらしている。「少子化対策プラスワン」計画(厚生労働省,2002)では,“地域における子育て支援の充実”,“社会保障における次世代支援”として,子どもの健康を守り,心身ともに健やかに育てることを支援する子育て環境づくりを地域一体となり取り組むことが推進されてきた。しかし,名須川ら(2015)は,祖父母世代は子どもに対する地域社会のしつけ力が低いことや母親一人に子育ての負担がかかっていることを認識していると報告している。加えて,地域での子育て支援環境づくりに対して,男女差なく各世代ともに8~9割が地域の支えが重要(内閣府,2015)だと考えている。また,厚生労働省(2009)は,地域子育て支援拠点事業等を通じた社会全体で子育て支援を促す試みを推進している。しかし,各地域の子育て支援のための取り組みは,必ずしも多様な家族形態に応じて,子育てを支えるための新たな地域コミュニティの構築に至っておらず,地域一体となった機能を果たすためには,地域コミュニティでの子育て支援ニーズに合わせた取り組みや連携などの課題が残されている。

そこで,沖合漁業の発達に伴い(竹内,1991),男性が長期間出漁することで家に不在となり,さまざまな地域活動を女性が中心となり担っていた(関他,2012),かつて漁村であり,現代も地域コミュニティ機能が残るA県での育児と育児環境から,現代社会で増加のひとり親や母親のワンオペ育児による仕事と育児や家事などの過剰な負担を軽減していくための地域コミュニティでのニーズに合わせた子育て支援に関する手がかりを得たいと考えた。

以上より,本研究の目的は,漁村地域における育児経験者である高齢女性が語る育児体験と育児環境を明らかにし,現代社会の育児や育児環境における地域コミュニティでの子育て支援に関する示唆を得ることである。

## II. 用語の定義

「育児」とは,小児看護辞典(2007)を参考に,母親自身の出産後から小学生までの間に行っている子どもの基本的な生活習慣の自立をはかり,子どもが社会に適応すべく能力を育む行為,とした。

「子育て支援」とは,小児看護辞典(2007),田井

(2019)を参考に,子どもが心身ともに健やかに育つために,子どもを育てる家庭を地域コミュニティで行う支援,とした。

「地域コミュニティ」とは,総務省コミュニティ研究会の定義(2007)を参考に,地域で生活するなかで顔の見えるコミュニケーションを通じた人と人とのつながりによって,その地域のさまざまな活動を主体的に行う集団,とした。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

本研究では,近隣の絆が強固な地域特性をもつなかで行われた年齢が80歳以上の高齢女性の育児体験を明らかにするため,半構造化面接を用いた質的記述的研究デザインを用いて実施した。

### 2. 研究対象者

A県の水産業を営む地域コミュニティに幼少期から在住し,その地域コミュニティでの育児経験を語る事が可能であり,年齢が80歳以上の高齢女性(以下,高齢女性)を研究対象者とした。年齢を80歳以上に設定した理由は,A県の水産業を営む近隣の絆が強固な地域コミュニティに幼少期から在住していることで,日常の暮らしの営みなかで,多世代間での関わり合いや継承の機会を多く経験し,その地域コミュニティでの豊富な育児経験を語る事ができると考えたためである。

### 3. データ収集方法

研究対象者への協力依頼は,A県在住の漁業関係者に研究の趣旨を説明し,対象者11名を紹介してもらい研究者が直接連絡を取った。研究参加協力依頼は,口頭と文書にて説明を行い,自由意思にて研究に参加を表明した研究対象者は,9名であったことから,9名を研究対象者として決定して,面接日程を調整した。データ収集は,2015年10月から2016年2月にインタビューガイドを用いて半構成的面接を行った。最初にインタビューを実施する地域コミュニティに在住する漁業組合の婦人会メンバーにインタビューによる予備調査を実施し,その内容を基に,今回のインタビューガイドを修正した。さらに,データ分析のプロセスで抽

出された意味内容に基づき適宜インタビューガイドを修正し、次のインタビューを行うよう努力した。インタビューの主な質問内容は、まず、フェースシートを用いて対象者の属性として、年齢、漁業の内訳、出生数、初産年齢、初産西暦、などを聴取した。次に、インタビューガイドに沿って、きょうだいを世話した経験の内容、育児の工夫、育児中の協力体制、育児における親との関係、地域コミュニティや家庭での育児継承内容や方法、地域コミュニティ活動、地域コミュニティのあり方・考え方などを語ってもらった。面接内容は、本人の許可を得てICレコーダーに録音した。面接回数は1人1回で、平均面接時間は $90.4 \pm 14.9$ 分であった。

#### 4. データ分析方法

録音データから個人ごとに逐語録を作成し、データは個人が特定されるような表現は避け記号化した。次に、作成した逐語録の要約を対象者にインタビューの実際と隔たりがないか口頭で確認し承認を得た。データを繰り返し読み、高齢女性の育児経験に関する体験内容から、地域コミュニティや育児環境との関連に関する内容を抽出し、意味のあるまとまりでコード化した。コードの意味の類似性と相違性について継続的比較・検討し、生データとの整合性を確認しながらサブカテゴリーとした。サブカテゴリー間の関連性を考慮しながらカテゴリーへと抽象化した。データ分析のすべての過程において、研究者間でのカテゴリーの一致が得られ

るまで検討や修正を繰り返した。さらに、母性看護学および小児看護学の専門家や質的研究の経験者からスーパーバイズを受け、分析内容や分析方法について検討や修正を行い、信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### 5. 倫理的配慮

宮崎大学医学部医の倫理委員会の承認(承認番号:第2015-107号)を得て実施した。対象者に本研究について直接説明する承認を得た後、最初に研究参加を断っても不利益を被らないことを説明した。本研究の目的と内容、研究参加と中断の自由、プライバシーの保護、研究結果の公表について口頭と文書で説明し、書面にて同意を得た。加えて、面接は対象者の予定に合わせて希望する日時とし、面接場所は、対象者の自宅あるいは希望する自宅周辺で行い、その際は個室を使用した。途中休憩を交えることで心理的、身体的な負担とならないよう配慮した。さらに、対象者は高齢女性のため、研究者から対象者に家族への説明希望の有無を確認し、説明希望時は研究者から家族へ本研究の趣旨を口頭と文書で説明し承認を得た。

### IV. 結果

#### 1. 研究対象者の背景

研究対象者は9名であった(表1)。データ収集に際し、研究対象者9名のうち、研究除外者や中

表1. 研究対象者の背景

研究対象者	年齢 (歳)	漁業の内訳 (船主)	同胞数 (人)	出生数 (人)	初産年齢 (歳)	初産西暦 (年)	面接時間 (分)
A	80	マグロ漁業	2	2	20	1955	92
B	82	マグロ漁業	2	3	21	1954	92
C	92	マグロ漁業	11	4	24	1948	92
D	82	定置漁業	8	5	23	1957	94
E	84	定置漁業	6	3	24	1955	108
F	87	カツオ漁業	6	4	21	1950	69
G	85	カツオ漁業	9	4	24	1955	66
H	91	定置漁業	8	5	21	1946	86
I	83	カツオ漁業	2	2	2	1955	115
平均±SD	$85.1 \pm 3.9$		$6 \pm 3.2$	$3.6 \pm 1.1$	$22.2 \pm 1.5$		$90.4 \pm 14.9$

表2. 漁村における高齢女性の母親としての育児を巡る体験

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
近隣の絆 (91)	家族も隣人も子どもに関わる	31
	生活のなかでの近隣との連帯	22
	互いの子どもを自分の子どものように「育て—育てられる」育児	13
	子どもの伝統儀式を通じた協同	10
	共通の文化伝承行事活動を通じた隣人との紐帯	9
	子どもと体験を共有する日常的な関わり合い	6
家業や子どもを守る家長としての役割を背負う (54)	船主の妻・母親として日常生活を仕切る	26
	親として全責任を負う	13
	常に父親の存在を感じられるようにする	9
	自分で全てのことを決断する	6
幼少期から子どもを世話し育児力を培う (36)	たくましく生きる糧を得る	19
	自分のきょうだいを日常的に世話する	9
	相手の気持ちや意思を推しはかり行動する	6
	社会的規範を身につける	2
日常生活に組み込まれた育児 (34)	特別なことをしない子どもの食事	17
	子どもを見ているとわかる	9
	多忙の合間に準備する子どもの生活必需品	6
子どもに地域コミュニティのルールを伝える (18)	子どもに合わせた生活時間	2
	地域コミュニティでの社会的規範を伝える	9
	子育ての価値観	6
子どもの健康増進・維持 (12)	近隣関係にある恥意識	3
	子どもの健康に注意を払う	10
	子どもが病気の時の世話の工夫	2

コード総数：245 ( ) 内の数値はカテゴリーのコード数を示す

断者はいなかった。年齢は80歳から92歳(85.11±3.90)、同胞数は2名から11名(6±3.2)、対象者の出生数は2名から5名(3.56±1.07)であった。研究対象者9名の夫はすべて船主であり、漁業の内訳は、マグロ漁業、カツオ漁業、定置漁業であった。そのため、夫は遠洋漁業や近海への出漁が多く、日常的に育児に参加できる状況ではなかった。

## 2. 漁村における高齢女性の母親としての育児を巡る体験

高齢女性が体験した育児の語りから分析した結果、母親としての育児体験について、245コードを抽出し、23サブカテゴリーと6カテゴリーに分類された(表2)。以下、文中では、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》とし、インタビュー中での語りを引用する場合は「 】, データ補足説明を( ), カテゴリーを示す定義を『 』で示した。

表1に記載した研究対象者9名をA～Iで示し、まず、作成したカテゴリー間の関係について説明する。

高齢女性は、体験した母親としての育児について、夫不在の暮らしにおいて【家業や子どもを守る家長としての役割を背負う】とともに【子どもに地域コミュニティのルールを伝える】【子どもの健康増進・維持】が地域コミュニティでの暮らしにおける育児のなかで重要な親役割であると認識していた。このことは、血縁や地縁による結びつきの強固な【近隣の絆】をもつ地域コミュニティであるからこそ母親にとって大切であった。また、子どもの世話は【日常生活に組み込まれた育児】であり、これは母親として育児を行うまでに獲得した【幼少期から子どもを世話し育児力を培う】経験を基盤として行われ、【近隣の絆】のなかで近隣住民に支えられるとともに、その地域コミュニティのなかで育児力をさらに培いながら育児が行われていた。したがって、母親にとって【近隣の絆】は、親役割を果たすことを支える育児環境であり、同時に育児力を培う経験の場としての育児環境という二重の意味があった。

#### 1). 暮らしの営みにおける育児と育児環境

##### 【近隣の絆】

『日常的に家族も隣人も互いの子どもに関与し、伝統儀式や文化伝承行事活動を通じた結びつきのある生活環境』である。このカテゴリーは、《家族も隣人も子どもに関わる》《生活のなかでの近隣との連帯》《互いの子どもを自分の子どものように「育て-育てられる」育児》《子どもの伝統儀式を通じた協同》《共通の文化伝承行事活動を通じた隣人との紐帯》《子どもと体験を共有する日常的な関わり合い》の6つのサブカテゴリーで構成された。地域コミュニティのなかには、どこの家庭にも子どもがおり、子どもの世話は、「ばあさんがみてくれよったかいな(祖母がみていたから)[H])と主に祖母が行っていた。加えて、隣人が「子をかかわいがつくだり、おったっちゃわ(子どもをかかわいがって、くださってね)[F])と母親が育った幼少期から続く漁村地域コミュニティとしての機能を持ち、《家族も隣人も子どもに関わる》など多様な子育ての担い手が身近に存在していた。町内での生活は「みんな親戚のような付き合い。何でもあったらすぐ飛んで来てくれる(何かあればすぐに来てくれます)

[B])と血縁や漁業を中心としたつながりは、同時に地域住民の強いつながりであり、助け合う生活であった。また近隣の漁師が「魚を振る舞って、お酒を飲ませたり、なんたりな(いろいろありましたよ)[E])と近隣地域の漁業者との交流があり、血縁や地縁による相互扶助が形成され、暮らしの一部をとともにすることで気心のしれた間柄となり《生活のなかでの近隣との連帯》があった。地域コミュニティのなかでは、日常的に近隣住民が子どもに関わり「自分の子どものように育ててきたとよ(のよ)。怒るときには怒って[G])というように、子どもの名前を聞くだけで、どのような子どもであるか、またその子どもの親や祖父母の人となりまで分かることから、住民の誰もが子どもを叱り、見守ることで互いの子どもに関与し、地域コミュニティのなかでしつけがなされることで、《互いの子どもを自分の子どものように「育て-育てられる」育児》となっていた。子どもは、リヤカーを引き、水揚げに携わるなど、日常的に近隣住民との関わりがあった。また、休日になると、母親の一人が自分の子どもも近隣の子どもも含め、海に遊びに連れて行き「みなをな(みな貝をね)、獲って。それを炊いた出汁で野菜を入れてかい(入れてから)、それを磯で食べよった(食べていたのよ)[I])とその場で取れた魚介類を調理し食事にするなど、地域コミュニティの子どもは、近隣の誰かが世話し、日常生活の営みのなかで《子どもと体験を共有する日常的な関わり合い》があった。子どもの成長に関する通過儀礼である「お宮参りとか100日のお祝いとか、名づけ祝い[A])などを夫の出漁中も近隣住民で《子どもの伝統儀式を通じた協同》により、子どもの幸福を願い執り行っていた。この地域コミュニティでは、町内毎にさまざまな祭りが執り行われており、ある町内では「お神酒あげっていつてな、お祝い事が年に2回。自分所でちゃんとして構えなんかあったっちゃわ(食事の用意をしなければいけなかったのよ)[F])と地域住民が、町内の各家を巡りご馳走を食べ、町内の安全と健康、豊かさを願い祭りを執り行い、それを楽しむことで地域コミュニティとしての絆が育まれていた。そのうえ、冠婚葬祭の折には「家の座敷で。お膳ばいを(お膳を)出さないかんかった(料理を用意してもてなしていたのよ)[E])とさまざまな行事毎

に近隣住民がその家に集まり手助けすることにより、さらに親密な間柄としてつながり《共通の文化伝承行事活動を通した隣人との紐帯》の強固な地域コミュニティが形成されていた。

## 2). 高齢女性の母親としての育児と育児環境

### (1)【家業や子どもを守る家長としての役割を背負う】

『夫不在における家長の役割として暮らしを守るために全責任を引き受け、日常生活を仕切るなかで、常に子どもに父親の存在を意識させ最終的に自分で全てを決断する』ことである。このカテゴリーは、《船主の妻・母親として日常生活を仕切る》《親として全責任を負う》《常に父親の存在を意識させる》《自分で全てのことを決断する》の4つのサブカテゴリーから構成された。母親は、夫が出漁中のため、子どもを育てる上で全ての事を任せられ「自分で責任もたんな[D]」と《親として全責任を負う》ことを引き受けていた。加えて、漁船の権利獲得について「その漁権がないと、一航海もできんと(できないから)。自分で判断して買うたと(買ったのよ)[B]」。船員は、「二十何人つこちよって(雇っていて)。取り仕切らんといかん訳やがな(取り仕切る必要があるのですよ)[A]」と高度成長期において、船主の妻と一資本家である経営者としての役割も併せ持ち《船主の妻・母親として日常生活を仕切る》暮らしであった。夫は帰漁すると、子どもに「絶対に母ちゃんに心配をかけるなよ、悪さはするなよ[I]」と言いつけていたことから、母親が夫の出漁中に「父ちゃんが帰ってきたら、父ちゃんも(謝りに)連れて行かな、ならんやろ(行かないといけなくなるでしょ)[I]」と繰り返す子どもに言い聞かせることで《常に父親の存在を意識させる》とともに、子どもに寂しい思いをさせないように努めていた。そして、これらの役割は《自分で全てのことを決断する》ことで果たされており、親として「子どもを育てんならんし(育てないといけなひですし)、相談したいことを相談できんし(相談することができないですし)、決断せんといかんがな(決断しないといけなひですし)[A]」と最終的に自分で稼業や子どもに関する決断を行うと同時に責任も引き受けていた。

### (2)【幼少期から子どもを世話し育児力を培う】

『幼少期から日常生活のなかで生きる力を育む

ことやきょうだいを世話する経験を通じて推測し振る舞いを身につける』ことにより、母親自身の育児を行うまでの間に育児力につながる経験のことである。このカテゴリーは、《たくましく生きる糧を得る》《自分のきょうだいを日常的に世話する》《相手の気持ちや意思を推しはかり行動する》《社会的規範を身につける》の4つのサブカテゴリーで構成された。母親自身の幼少期の暮らしは、戦時下であり、自給自足の生活であることから、家庭での手伝いは「水道があるわけでもなし(水道もないし)、遠い所に水を汲みに行かんらんかった(行かなければならなかった)[F]」など自分のできる労働を担っていた。日常の遊びは、大勢の異年齢の子どもと「縄跳び、おはじき、山登り、かくれんぼ[H]」など外遊びのなかで、主体性や豊かな人間性を育てており《たくましく生きる糧を得る》経験となっていた。弟や妹が風呂から上がると自分の母親から「着物着せんか、何せんか(着物を着せて。あれをして)[D]」と言われながら風呂や排泄の世話をしたり、小学校への通学や友達と遊ぶ時でも「赤ちゃんかろうて行ったり遊んだり(背中におんぶして行って遊んでいた)[B]」と子守など日常的に自分の母親から弟や妹の世話を指示されつつ、自分で試行錯誤しながら《自分のきょうだいを日常的に世話する》経験の蓄積があった。暮らしのなかで、自分の母親の稼業や子育てを目の当たりにしたり、きょうだいの世話をしたりすることで、「おっかさんは、忙しかったとよ(お母さんは、忙しかったのよ)[F]」と子どもながらにその場の雰囲気を感じ取り、身近な人との関わり合いによって自分がどのように行動すればよいのか《相手の気持ちや意思を推しはかり行動する》ことを学んでいた。暮らしのなかで「自然と上んもんが下んもんに教えて(年上が年下に教えて)。下んもんも(年下の子どもも)自然に覚えて[D]」と友人や異年齢の子どもとの関わりを積み重ねることで地域コミュニティに必要な振る舞いにつながる身近にある経験を通して《社会的規範を身につける》経験を蓄積していた。

### (3)【日常生活に組み込まれた育児】

『幼少期から日常的に子どもを世話した経験の蓄積により、子どもの世話や生活時間が自然と日常生活の一部として営まれる』ことである。この

カテゴリーは、《特別なことをしない子どもの食事》《子どもを見ているとわかる》《多忙な合間に準備する子どもの生活必需品》《子どもに合わせた生活時間》の4つのサブカテゴリーから構成された。乳児期の離乳食は、重湯より開始し、次に、野菜や魚など「汁だけ[D]」「かぼちゃを潰して[H]」と家族と同じ食事内容で調理方法を工夫し、子どもが摂取しやすいように柔らかくするなど形状を変化させた《特別なことをしない子どもの食事》であった。母親としての初めての育児でも、たとえば、排泄時は「顔が違うがな(顔が違うから)[F]」、「お尻あげて[E]」といった子どもの表情や行動を注意深く観察しており、子どもの態度から排泄サインを読み取り、トイレに連れていくことを繰り返すことによっておむつを外していた。このように、母親自身の育児は、幼少期から日常的に弟や妹を世話する経験の蓄積により《子どもを見ているとわかる》というように、子どものサインに応答する力を幼少期からの経験から自然に身につけ子どもを世話していた。日常の暮らしを仕切るなかで出産準備として「ちゃんと作っちゃかんと(きちんと準備していない)いざできた時にいかんかい(出産時に困るといけないから)[E]」と不要の浴衣をおむつや肌着に作り直すことや、子どもの衣類を繕うなど《多忙な合間に準備する子どもの生活必需品》として日常生活を仕切りながら整えていた。子どもの起床は、毎日「朝は炊事しよったら起きっかい、ご飯食べさすつとよ(炊事をしていたら起きてくるのでご飯にするのよ)[D]」と子どもの起床時間を予測しながら朝食準備をしており、生活リズムを意識的に作らなくても《子どもに合わせた生活時間》となっており、おのずと規則正しい基本的な生活習慣の獲得につながる暮らしであった。(4)【子どもに地域コミュニティのルールを伝える】

『子どもに対して地域コミュニティにおける近隣関係を意識し、子どもに社会の一員としての意識をもたせる』ことである。このカテゴリーは、《地域コミュニティでの社会的規範を伝える》《子育ての価値観》《近隣関係にある恥意識》の3つのサブカテゴリーから構成された。母親は、子どもに「人に迷惑をかけたらいかん(いけない)[I]」と繰り返し言い聞かせ行儀をしつけていた。加えて、人に怪我を負わせる危険な遊びと判断すると子どもを「叩

いてもらっち(叩いてから)、痛いどがっち言うてかい(痛いでしょうって言ってね)。人も痛いつちかい(痛いので)、怪我さすもんじゃねえど(怪我をさせるものではないよ)[E]」と痛み感覚を子どもに体験させていた。さらに、母親は、子どもに是非善悪の判断能力を習得させるために、「母ちゃんが頭を下げに行かないかんことは、しなさんな(お母さんが謝りに行かないといけないようなことは、したらいけません)[I]」とこの地域コミュニティの一員としての意識をもたせるよう繰り返し言い聞かせ、常に近隣を意識して、家庭のなかで《地域コミュニティでの社会的規範を伝える》ことで子どもの行儀をしつけていた。地域コミュニティでの暮らしにおける《子育ての価値観》は、育児において重要な判断基準であった。母親は、子どもが近隣住民に迷惑をかけないために「曲がったことを言わない[G]」ことや「人に迷惑かけない[D]」ことを重視し、信念をもち育児を行っていた。母親は「自分の子どもが何しちよった、かにしちよった(あんなことしていた、こんなことしていた)いろいろな言われるのが好かん(いろいろな言われるのが嫌だ)[G]」と近隣住民から自分の子どもの行儀に関して指摘されるのは、恥ずべきことであると《近隣関係にある恥意識》を強くもつとともに、子どもが家の外で恥をかかないで済むように近隣関係を意識し、母親は、子どもの行儀をしつけることを重視していた。

#### (5)【子どもの健康増進・維持】

『常に子どもの健康に注意を払い、世話を工夫することで健康増進に努める』ことである。このカテゴリーは、《子どもの健康に注意を払う》《子どもが病気の時の世話の工夫》の2つのサブカテゴリーで構成された。母親が、夫の出漁中は特に、子どもが健康で過ごせるように「外ん空気を吸わすつといかん(外気に触れさせるといけない)[D]」と風邪をひかせないように気づかっていた。そして、子どもが発熱すると夫不在時に「死んだらどうしようかと思って[I]」と常に不安な思いを抱きながら、すぐに病院を受診するなど《子どもの健康に注意を払う》ことで子どもの体調管理に努めていた。母親は、自分自身の幼少期からの経験や近隣住民とのやり取りを通して「子どもがはしかをすれば、隣もはしかをすっかい(はしかにかかるから)[D]」

と自分の子どもが麻疹罹患時であっても、近隣の子どもと一緒に世話をしていた。しかし、「赤ちゃんだけは、ほかん所に寝て(他の場所に寝かせて)[G]と乳児が感染し、重篤化しないように隔離するなど《子どもが病気の時の世話の工夫》により、いのちに関わる病気から子どもを守っていた。

## V. 考察

漁村地域における育児経験者である高齢女性が語ったのは、1946年から1957年の戦後復興や社会制度が制定されていく時代での育児体験と育児環境であった。この時代は、1937年に母子保護法が制定され、1938年に厚生省設置となり、児童保護が積極的に推進された。戦後は、戦災孤児の保護対策、1948年に児童福祉法が施行され、1947年から1950年は第一次ベビーブームであった。現代社会とは、社会背景の違いや限定した地域での育児体験と育児環境であるため限界はあるが、漁村における高齢女性の母親としての育児を巡る体験と地域コミュニティでの子育て支援について考察する。

### 1. 近隣の絆に支えられ暮らしを維持するための母親が担う親役割

この地域コミュニティは、古くからの漁村であるため、漁村共同体として強固な連帯性により、生活や行動を強く規制している(山岡, 1965)という特徴があると考えられる。母親は、夫不在の暮らしのなかで【家業や子どもを守る家長としての役割を背負う】という産業の担い手として経済活動などの主要な役割をも担っていた。そのため、【近隣の絆】を維持することは、暮らしの基盤となることであり、それは同時に社会とのつながりとして維持しなくてはならないものであった。したがって、母親にとって家庭で子どもの行儀をしつけることは、子どもが地域コミュニティの一員として期待される振る舞いを身につけ、近隣住民に認められるために親としての責任を果たすことであり、肝要であったことが考えられる。このことから、母親は、地域コミュニティでの夫不在の暮らしにおける育児のなかで特に重要な親役割として、語りの中心に【子どもに地域コミュニティのルールを伝える】ことや【子どもの健康増進・維持】

について語ったと考える。

当時の漁村社会は、共同体的性格を強く残存し、漁場の共同利用を通じて、地理的孤立性・閉鎖性、内部的な親族結合の強固さ、共同防御・共同扶助の慣行などにより一層強化される(山岡, 1965)と明らかにされている。この地域コミュニティでも同様に、生活共同体として強固な絆をもち、夫不在の暮らしにおいて、地域活動を女性が中心となり担うことで相互扶助が形成されていた。母親は、水揚げや田畑など多様な活動をしており、その多様な場において、子どもは、手伝いを通じて多くの大人と直接関わる機会が日常的に身近にありふれていた。この地域コミュニティでの暮らしにおいて、近隣住民が日常的に子どもに関与することは、ごく自然なことであり、父親が日常的に育児に関われる機会が少なくても、祖父母や隣人などの多様な子育ての担い手となる【近隣の絆】によって母親の育児が支えられていたことが示された。

### 2. 近隣の絆に支えられ幼少期から日常的に培われる子どもの世話

当時の地域コミュニティにおける暮らしは、水場や風呂など共同で利用する機会が日常的に多く、母親の情報交換の場であるとともに育児を学ぶ多様な場が身近に存在していた。さらに、地縁による結びつきが強く、近所づきあいもあり、親以外の地域コミュニティで生活する大人たちみんなが育児を行っていた(大日向他, 2005)。この地域コミュニティも同様に、地域住民の暮らしそのものが、血縁や地縁による相互扶助関係の【近隣の絆】をもち、地域コミュニティが一体となって子どもと親を見守るための子育て支援のシステムとして機能していたことが示された。また、幼少期から日常的に自分の弟や妹の世話、家庭での手伝い、異年齢の子どもとの遊びのなかに子守が組み込まれた生活(森尾, 2002)のなかで、身近な誰かに子どもの行動や反応を解釈することを助けられたり、教えられたりすることを繰り返すことで、子どもが表出する態度や行動から、ニーズを読み取る体験を蓄積していた。ゆえに、母親自身の育児は、【日常生活に組み込まれた育児】となっており、これは【幼少期から子どもを世話し育児力を培う】経験を基盤とし、地域コミュニティとしての【近隣の絆】



に支えられ親準備性が養われることで、母親自身の育児は自然な営みとなっていたと考える。したがって、高齢女性にとっての子どもの世話は、日常の暮らしのなかで幼少期から生涯にわたり子育てに携わることで育児力が培われていた。

### 3. 現代社会における子育て支援への示唆

漁村共同体としての地域コミュニティ機能をもつ育児環境のなかで、母親は夫不在の暮らしにおいて、強固な【近隣の絆】に支えられることにより、子どもが社会の一員としてどのように行動していけばよいのか、繰り返し伝えることや体験させることで子どもの社会化を進めていた。さらに、日常生活のなかで幼少期から子どもの世話を通じて、子どものニーズを読み取り、応答する力を自然に身につけていた。このことは、ひとり親家庭やワンオペ育児が増加し、家族内のサポートを得にくい現代において、地域コミュニティが一体となって、子どもと親を相互扶助できるシステムとして機能していくことが重要であることを示している。しかし、地域コミュニティの喪失や現代社会の多様化した子育て環境においては、日常生活のなかで子どもと大人が交流できる機会を意図的につくらなければ、多様な経験ができない時代である。したがって、地域コミュニティのなかで異年齢の世代や子どもの発達段階に応じて親同士が交流できれば、親は気軽に育児相談や育児について身近に学ぶ機会が増加し、地域コミュニティのなかで多様な親の状況や意向に合わせて支援が可能になると考える。さらに、親にとっても地域コミュニティの一員として成長することにもつながり、子どもの社会化を育む機会が増加すると考える。また、日常的な子どもの世話では、幼少期から長年の体験による積み重ねが重要であり、地域コミュニティのなかで、子どもの特性や基本的な世話を学ぶ機会を意図的につくり、次世代育成として多世代を交えて親準備性を養う教育機会を提供していくことが必要であると考えられる。

子育て支援では、その地域コミュニティの強みや特性を踏まえ、身近な人々との日常の関わりの中で、子どもと親を相互扶助できる地域コミュニティの機能として、地域自治体やNPO法人、ボランティア団体を中心に地域住民と協力しながら、

地域活動を実践していく必要があり、多様な親の状況や意向に応じて、多世代で互助・共助が可能となる地域包括ケアシステムとして、多世代連携・強化していくことの重要性が示唆された。

## VI. 結語

高齢女性が語る育児は、【近隣の絆】という地域コミュニティのなかで培った育児力を基に、夫不在の暮らしのなかで子どもを育て、その地域コミュニティのなかで子どもの社会化を育てる親役割を果たすこととして語られた。したがって、子育て支援では、その地域の強みや特性を踏まえ、子どもと親を相互扶助できる地域コミュニティ機能として地域活動を実践していく必要があり、多様な親の状況や意向に応じて、多世代で互助・共助が可能となる地域包括ケアシステムとして、多世代連携・強化していくことの重要性が示唆された。

## VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は南九州地方1県という限定された地域での結果であり、地域特性があるため一般化することは難しい。さらに、育児は暮らしの営みそのもののなかで行われるため、高齢女性が一度に育児全体を語るのには難しく、語りについて十分なデータが得られたとは言えない。今後は、調査を継続し研究対象者数を増やしていくことが課題である。

## 謝辞

本研究にご協力頂きました対象者の皆さま、関係者の皆さまに深く感謝致します。

## 学会発表・研究助成

本研究は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」、"みやだいCOC事業"のうち「平成27年度みやざき地域志向教育研究経費」、「女性研究者支援加速化のための研究助成」の研究助成をうけており、一部は、第63回日本小児保健協会学術集会上において発表した。利益相反に関する開示事項はない。

## 文献

- 大日向雅美・荘巖舜哉(編)(2005):子育ての環境学:  
＜実践・子育て学講座＞③,153-156,大修館書店,  
東京
- 岡本裕子,古賀真紀子(2004):青年の「親準備性」概  
念の再検討とその発達に関連する要因の分析,  
広島大学心理学研究,4,159-172
- 柏木恵子(1996):子どもの発達と父親の役割. 牧野  
カツコ,中野由美子,柏木恵子編著,172-180,ミネ  
ルヴァ書房,京都
- 厚生労働省.“少子化対策プラスワン” <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/09/h0920-1.html> [2016-9-27 現在]
- 厚生労働省.“平成28年版厚生労働白書－人口高齢  
化を乗り越える社会モデルを考える－”  
[http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/  
dl/2-03.pdf](http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/dl/2-03.pdf) [2017-3-31 現在]
- 関いずみ,後藤雪絵(2012):漁村における高齢者支  
援活動の実態と課題-女性組織の活動を事例と  
して-,生活学論叢,22,29-35
- 総務省.コミュニティ研究会.コミュニティ研  
究会中間とりまとめ.[https://www.soumu.  
go.jp/main\\_sosiki/kenkyu/new\\_community/  
pdf/080724\\_1\\_si3.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/new_community/pdf/080724_1_si3.pdf) [2017-3-31 現在]
- 田井康雄(2019):「子育て支援」の基礎理念につ  
いての考察,人間科学,Journal of the Faculty  
of Human Sciences, Kyushu Sangyo Univ., 1,  
60-67
- 竹内利美(1991):漁村と村落: 竹内利美著作集 2,  
19-22,名著出版,東京
- 寺本妙子,柴原宜幸(2015):中高年女性による地  
域子育て支援に関する調査研究:現在の子育て  
に対する違和感について. 日本橋学館大学紀要,  
14, 61-73
- 内閣府.“平成25年度「家族と地域における子育て  
に関する意識調査」報告書” [http://www8.Cao.  
go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/  
pdf/2-3.pdf](http://www8.Cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/pdf/2-3.pdf) [2015 - 5-7 現在]
- 名須川知子,上月素子,井上千晶 他(2015):世代間  
交流としての子育て支援に関する研究－祖父母  
世代の意識調査から－,兵庫教育大学研究紀要,  
47, 11-18
- 日本小児看護学会(監)(2007):小児看護辞典,27-28,  
へるす出版,東京
- 森尾晴香(2002):昭和戦前期におけるムラの子育  
て－群馬県北橘村大字下南室「農繁託児所」を事  
例として－,農村生活研究,117, 24-31
- 山岡栄市(1965):漁村社会学の研究,21-28,228-234,  
大明堂,東京